



第1回テーマ展

ただみ・冬の暮らし

屋根の雪掘り
旧長谷部家住宅(叶津番所) 2022年2月
撮影地: 只見町叶津



テーマ展会期

2023 1/31^火 → 5/28^日



ただみ・モノと暮らしの
ミュージアム

はじめに

福島県只見町は、日本有数の豪雪地帯です。この町では冬のくらしをささえるためにさまざまな工夫をしてきました。この展示では、「暖をとる」「身にまとう」「雪で遊ぶ・家で遊ぶ」「雪を掘る」の4つのテーマで、冬のくらしの工夫を紹介します。くらしの中の道具は、時代とともに、より使いやすいように工夫されていき、素材も変化していきます。そのうつりかわりを収蔵品から見ることができます。

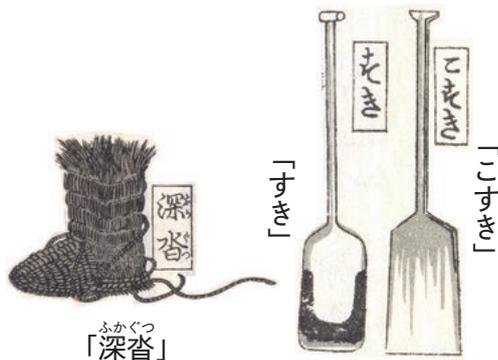
また、交流ホールの中のいろいろな間では、冬から春への季節に合わせて、行事の飾りや調度品を展示しています。あわせてお楽しみください。



「屋上雪掘図」
やねのゆきほるづ



「掘除積雪之図」
つもりたるゆきをとりぬくづ
(積もっている雪をとりぬくぞく図)



「深沓」
ふかくつ

「杓」

「杓子」

「杓子」

上の図は、江戸時代の1897年(天保8)に刊行された『北越雪譜』の挿絵です。著者の鈴木牧之(1770-1840)は現在の新潟県南魚沼市塩沢の人です。図の中の道具が展示されています。探してみてください。

画像出典

鈴木牧之著・山東京水画『北越雪譜』, 初編上之巻, 天保8年(1837)刊(本館所蔵)

第1章 暖だんをとる

冬あたたを暖ぬかくすどぐすための道具しょうかいを紹介しょうかいします。

「ヒバチ」は、中ちゅうに灰はいを入いれ、火ひ起おこしした炭すみ火びを置おいて使つかう暖だん房ぼうの道具どうぐですが、「ユガマ」(鉄てつ瓶びん)をのせのて湯ゆをわわかしました。「ダルマストーブ」は、薪まきをくくべて燃もやして使つかう暖だん房ぼう器き具ぐで、煙えん突とつを家けの外ぐわいにつつけて外ぐわいに煙けむりを出いします。ナベなべをのせのて煮に炊たきなどにもよく使つかわれました。「セキユストーブ」や「ファンヒーター」は灯とう油ゆを燃ねん料りょうとし、現げん在ざいでも使つかわれている暖だん房ぼう器き具ぐです。

床ゆかをくりぬぬいて「コタツナベ」を設せつ置ちしたホリゴタツは、熱ねつ源げんとして炭すすを入いれました。その上うへに「コタツヤグラ」を置おき、「コタツガケ」をかけて足あしを入いれ暖ぬをととりました。その後のち、持もち運はこびのできる「ニカ二イ階アンカ」に布ふ団とんをかけたコタツが登とう場じょうしました。熱ねつ源げんも木もく炭たんから豆まめ炭たん、電でん気きへとうつりかわり、「マメタンコタツ」、「デンキコタツ」が登とう場じょうしました。

寝ねる時ときは、暖だん房ぼうの道具どうぐを布ふ団とんに入いれて暖ぬをととりました。「ヒバコ」には炭すす火かを入いれました。1人ひとり用ようの暖ぬをととる器き具ぐが「アンカ」です。「アンカ安バイ」(木もく炭たん粉ふんと桐きり・麻あぎがらばいの混こんごう)を入いれた「アンカ」、豆まめ炭たんを入いれた「マメタンアンカ」、電でん熱ねつ



コタツガケ、コタツヤグラ



マメタンコタツ



デンキコタツ



ヒバコ

線を使った「デンキアンカ」がありました。お湯を入れる「ユタンポ」もこの仲間で、中国語の湯婆が語源です。電気を使い敷布団として使う「デンキモウフ」も寝る時に活躍します。

「アンカ」を小型化し、持ち運べるのが「カイロ」で、「カイロバイ」を入れた灰式のものがありました。1923年（大正12）にベンジンと白金（プラチナ触媒）の化学反応を利用した「ハクキンカイロ」が発売されました。1978年（昭和53）に発売された「使い捨てカイロ」は、鉄粉と酸素の化学反応を利用したものです。



マメタンアンカ



ユタンポ



ハイシキカイロ



ハクキンカイロ



使い捨てカイロ

第2章 身にまとう

雪深い只見町では、その服装にも特徴があり、昔から寒さと雪をしのぐための工夫があります。

豪雪地帯の共同作業は雪道踏みです。雪が降った時、通れる道を作るために雪を踏みしめる作業です。スゲでできた「三角笠」をかぶり、「ミノ」を雪よけとして背中に着て、現在の長靴の役割の「フカグツ」をはきました。「ツルカンジキ」は、現在の「スノーシュー」と同じ役割の民具で、靴に付けて雪道踏みをしました。あまり雪が深くない地域では、「ユキフミダワラ」で雪道踏みを行いましたが、深い雪に足を取られてしまうため、只見町では使われませんでした。

家の中では、「ソデナシ」や「ワタイレタンゼン」などの綿入れわたいの暖かい服あたたを着ました。

外出の時の服装では、古いかぶり物として「カンゼンブシ」^{帽子}があります。これは頭から肩までおおうもので、頭と着物の両方を雪から守ることができ、雪を振りはらうのも楽なことりょうほうから重宝ふされました。その後、毛織物けおりものや綿織物めんの「カクマキ」^{角巻}が女性用の防寒具ぼうかんぐとして普及ふきゅうしました。ほぼ全身がすっぽりおおわれている「カクマキ」姿は、雪国の風物詩ふうぶつしともなりました。男性は「カラス」(マント)、「ガイトウ」^{外套}などを防寒具として身につけました。昭和時代戦前期には、綿入れ帽子ぼうしの「ボウカンボウ」^{防寒帽}も普及しました。現在では「スキーウェア」を普段の外出着とするふだんこともあります。



フカグツ



ナガグツ



カンゼンブシ



カクマキ



カラス

第3章 雪で遊ぶ・家で遊ぶ

雪が多く降る地域では、家の近くでさまざまな雪遊びができます。「ソリ」を使った遊びは一番の楽しみです。寒中が過ぎた2月上旬、降り積もった雪が沈む時期には、内部がかたくしまって「カタユキ」の状態になります。こうなると「ソリ」が沈むことなく、どこへでも遊びに行けるようになります。「ソリ」の素材は、木からプラスチックへと変化していきました。

スキーも冬の遊びの代表で、裏山でスキーを楽しみました。スキー板の一番古いものは、木の板にひもで長靴を固定するものでした。すべりやすいように、雪との接地面にロウを塗って工夫しました。1970年ごろになると、靴をスキー板に固定する器具のカンダハー（ビンディング）が登場し、スキー技術も大きく向上しました。

「カタユキ」の時期には「スケート」で遊びました。スケートリンクのない只見町では、木とトタンで作った「スケート」を長靴につけて、「カタユキ」の上をすべって遊びました。参考として、現在のハーフスピードとフィギュア用の「スケ



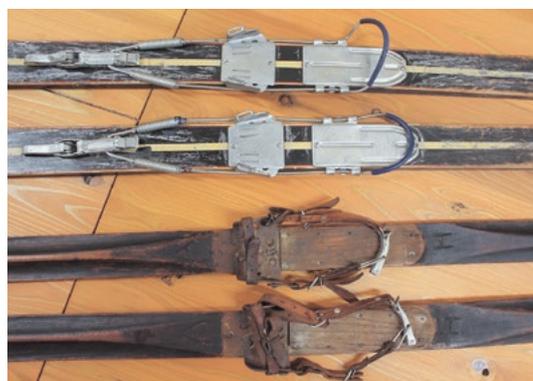
ソリ（木製）



ソリ（プラスチック製）



上から：ストック、スキー、スキーグツ
スキー、ストック、スキーグツ



クツの固定部分
上がカンダハー、下がベルト

ートグツ」も^{てんじ}展示しています。

現在では、「スノーボード」や「クロスカントリースキー」でも遊びます。「クロスカントリースキー」は「クロカン」と略され、体育の授業で行われるくらい^{みぢか}身近なものです。

家の中では「百人一首」などのカルタや「パッタ」(^面メンコ)、「ザック」(お手玉)で遊びました。子どもたちはパッタ^{打ち}ブチに夢中になりました。



スケート



パッタ (メンコ)

第4章 ^ほ雪を掘る

雪の多い^{ちいき}地域では、降り^ふ積^つもる雪を除く^{のぞ}作業は毎日^{さぎょう}のように行います。只見町では雪かきのことを“雪掘り”と^{まいにち}いいます。積もった雪が^や屋根にまでとどき、^ね屋根の雪をおろすには、家のまわりを掘り出す^{ひつよう}必要があるという^{ひょうげん}表現です。

雪掘り^{どうぐ}道具の古いものは「コウシキ」です。只見町の「コウシキ」は柄の持ち手^えがT字形になっていて力を入れて掘れるのが特徴で、会津地方の中でも豪雪地^{ごうせつち}帯で多く見られます。「コウシキ」のへらを^{たて}縦にして雪を切り、次にへらを^{よこ}横にして雪を四角に切り取り、そのままへらに^の載せて遠くへと^{とお}投げ飛ばします。「コウシキ」を作るには、ブナの木を^{まさめ}柁目(内部が詰まった材木の中心部分、反りに^{きど}くい)に割って^わ荒型に木取りして「コウシキノヤマドリ」を作り、それを^{すうねん}数年かけて^{かんそう}乾燥させ、^{けず}削って^{かこう}加工して「コウシキ」になります。

「タンスコ」と呼ばれるスコップも^{じよせつ}除雪には^か欠かせない道具です。雪を掘り、^{さい}投げ飛ばす際に使います。「スノーダンプ」は雪を^{はこ}運ぶ道具で、「タンスコ」よりも多くの雪を一度に運べるようになりました。現在では「ママさんダンプ」と呼ばれる^{かる}軽い「スノーダンプ」が主流で、あまり力のない人でも^{らく}楽に雪を運ぶことができます。雪押し棒(ハンドラッセル)も^{とうじょう}登場しました。

現在では、通勤・通学時間までには、除雪車による除雪が行われます。家庭用の小型除雪機を持っている家も多いです。展示している「ジョセツキカイ」は、フジイが製造した大型除雪機で、小型化される以前のものです。除雪車や除雪機によって除雪にかかる時間は大幅に短縮されました。



コウシキ



タンスコ



スノーダンプ



ジョセツキカイ

発行 ただみ・モノとくらしのミュージアム

〒968-0602 福島県南会津郡只見町大倉窪田30番地

TEL. 0241-86-2175 E-mail: mono_kurashi_museum@hyper.ocn.ne.jp

企画・展示：原永円香、目黒仁也、渡部めい、久野俊彦

執筆・編集：原永円香（学芸員）

写真協力：新国 勇

発行日 2023年1月31日